研究論文

秋田県湯沢市に現存する歴史的土蔵建築に関する一考察

―細部意匠と大工棟梁の観点から―

Warehouses of the Yamamo Miso and Soy Sauce Brewing Company and the Former Takahashi's House

– Consideration of details and carpenters –

○成田　翔音*　　崎山　俊雄**
○Shion NARITA　　Toshio SAKIYAMA

Abstract: Yamamo Miso and Soy Sauce Brewing Company is a miso and soy sauce brewer and store located in the Iwasaki district of Yuzawa City, Akita Prefecture. There are several warehouses on the premises. The former Takahashi's House was built as a residence for Shichinosuke Takahashi. It consists of two buildings: the main building and the warehouse. Examples of the architecture of breweries in Akita Prefecture are introduced in the report on old architecture. However, these are only basic information. In this study, we examined these storehouses from two perspectives: the decoration of the buildings and the carpenters, based on field surveys. This research could also be used for urban development that takes advantage of local historical architecture.

キーワード: 土蔵建築、細部意匠、大工棟梁
Keywords: Warehouse, Detail, Carpenter

1 はじめに

本稿は、ヤマモ味噌醤油醸造元（秋田県湯沢市）が所有する建築遺産群について、その歴史的位置付けを試みた一連の研究の一部である[1]。特に今回は、建築遺産群の中で最も特徴が現れている土蔵建築について、細部意匠、大工棟梁の視点から分析を行った。

ヤマモ味噌醤油醸造元は、初代高橋茂助により慶応 3 年（1867）に創業された味噌・醤油の醸造元である。建物は主屋、店舗、工場が一体となり、明治期以降に建てられた複数の土蔵建築を内部に含む。旧高橋家住宅は大正 9 年から 25 年に渡って岩崎町長を務めた七代目高橋七之助の私邸である。一部二階建ての主屋と、内部で接続された土蔵からなる。暫く空き家の状態が続いていたが、令和 3 年よりヤマモ味噌醤油醸造元（分家筋に当たる）の所有となっている。

秋田県湯沢市には、優れた醸造建築遺構が多く残る。その中で土蔵建築は、倉庫としてだけでは無く、工場の一部として利用されてきた。この点で、秋田県において土蔵建築は当時の地域の産業の様子を示す建築と捉えられる。また秋田県の土蔵建築については、『秋田県の近代化遺産』[2]、『秋田県の近代和風建築』[3]で、調査に基づいた個別の事例が紹介されている。そこでは醸造元の近世の土蔵は、装飾的に仕上げることで持ち主の財力を示す意味を持つことが示されている。本研究では、そのような土蔵建築が近代以降どのように変化したのか、また産業建築として地域とどのような関わりがあったのかについて、新たな知見を得ることができるだろう。

*東北学院大学大学院工学研究科環境建設工学専攻
**東北学院大学工学部環境建設工学科
○連絡先 E-mail:s2294404@g.tohoku-gakuin.ac.jp

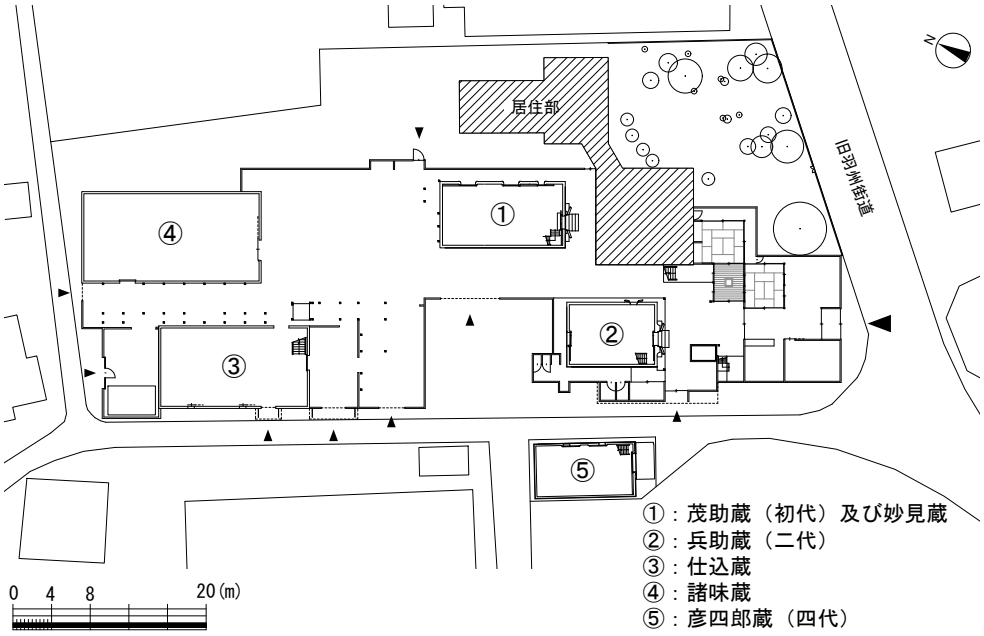

図1　ヤマモ味噌醤油醸造元配置図（実測調査に基づき著者作成）

2 調査方法と分析の概要

本稿では6棟の土蔵建築に着目し、現地調査に基づいて建築的特徴を考察する。現地調査では各建物の実測、写真撮影を主に行い、建物の地域性、時代性が現れる部分を把握した。具体的には、各建物の配置、規模、寸法、材料、細部の納まりなどである。以降の章ではこの結果をもとに分析を進める。まず第3章では工場部分の土蔵建築の配置について検討した。第4章では各土蔵の基本的な情報を押さえ、第5章で外壁の仕上げと細部意匠、大工棟梁について検討した。

3 工場部分の土蔵の配置について

現地調査に基づいて作成した配置図を図1に示す。旧羽州街道に南面する主屋と店舗、その奥の工場に分けられる。2つの領域の間には側道に面した屋外作業場があり、搬入口を通して工場に直接物品を運び込めるようになっている。建物の中心には2つの領域を南北に貫通する空間が設けられ、その周りに様々な役割を持つ土蔵が配置されている。とりわけ工場部分は、仕込蔵、諸味蔵が味噌や醤油の生産プロセスに対応するように配置されていることがわかった。例えば、仕込蔵では麹作り、味噌の熟成が行われ、諸味蔵では醤油の熟成が行われる。熟成が完了した味噌、醤油は諸味蔵前の作業場に送られてボトル詰めがされる、といった具合である。

4 各蔵の建築について

4.1 茂助蔵（初代）及び妙見蔵

内部には棟札が残っており、建設年代は明治16年、棟梁は佐藤粂治、脇棟梁は齋藤彦右衛門であった。棟札の裏面には大工として7人の名前

図2　茂助蔵（初代）及び妙見蔵
出入口付近（著者撮影(2023)）

図3　茂助蔵（初代）
及び妙見蔵妻面
（著者撮影(2023)）

図4　茂助蔵（初代）及び妙見蔵
2階（著者撮影(2023)）

が挙げられている。平面規模[4]は梁間 3.5 間(約 6.5m)・桁行 7 間(約 12.7m)。2 蔵に分かれる下階では茂助蔵(初代)が桁行 7 間のうち 4.5 間を占め、妙見蔵が 2.5 間を使う。基礎には院内産の石が積まれている。壁面は腰下が石張り、腰上が漆喰仕上げである。出入口周りの様子を図 2 に示す。正面と背面は黒漆喰で仕上げられているが、色はややくすんでいる。正面の扉は 2 重構造になっており、外側の扉は両開きで、出入口上部には屋号が描かれている。側面の工場側は一部正面の漆喰を塗り回し、その他は下半分が黒色、上半分が白色の漆喰で仕上げられる(図 3)。側面のもう一方は白色の漆喰で仕上げられ、窓周りの装飾には黒色の漆喰が使われている。内部の小屋組は3段重ねの和小屋形式で、下の 2 段を極短の束で殆ど隙間なく重ねた上に 3 本の小屋束を立て、その上に最上段の梁を渡して棟木を受ける(図 4)。

4.2 兵助蔵(二代)

店舗入り口から最も近いところに位置する蔵である。現在は倉庫として使われている。内部に棟札が残っており、建設年代は明治 27 年、棟梁は佐藤才治であった。2 階建てで、平面規模は梁間 3.5 間(約 6.4m)・桁行 5 間(約 9.1m)、棟までの高さは約 2.4m となる。基礎は煉瓦積み(寸法は 230mm×110mm×50mm)である(図 5)。外壁は 4 面全てが黒漆喰の磨き仕上げである。また腰下部分には図5のような木製の鞘飾りが取り付けられている。正面の扉(図 6)は 3 重構造で、外側には黒色の漆喰で仕上げられた両開きの扉が、内側には漆喰塗りの引き戸(現在は動かない)と潜戸が設けられる。出入口上部には家紋が描かれている。内部の小屋組は 3 段重ねの和小屋形式で母屋は用いない(図 7)。下段には中央部が情報に曲がった梁を用い、3 本の梁はほぼ等間隔に重なる

4.3 仕込蔵

棟札は残っておらず、建設年代、棟梁は不詳である。現在は味噌の保管場所として使われ、1階に醸造用の機械が置かれている。2 階建てで、平面規模は梁間 4.5 間(約 8.1m)・桁行 8.5 間(約 15.2m)、棟までの高さは約 6.4m となっている。基礎には院内産の石が使われている。正面と工場に面した側面の外壁は白色の漆喰で仕上げられ、

図 5 兵助蔵(二代)妻面腰壁
(著者撮影(2022))

図 6 兵助蔵(二代)出入口付近
(著者撮影(2022))

図 7 兵助蔵(二代)2 階
(著者撮影(2022))

図 8 仕込蔵妻面外観
(著者撮影(2022))

図 9 仕込蔵出入口付近
(著者撮影(2022))

図 10 仕込蔵 2 階
(著者撮影(2022))

現況はくすんだ色合いになっている。外部に面した側面は、上部が砂漆喰で仕上げられ、下部それとは異なる色で塗り分けられている(図 8)。窓は外部に面した側面に設けられており、窓周りには外壁上部と同じ色の縁取りがある。出入口周りには縁取りは見られない。内部の 1 階は土間となっており、床の高さは工場と揃えられている(図 9)。小屋組は 3 段重ねの和小屋形式だが、最下段の梁の中央部が 70mm ほど下がっており、後から柱を添えて補強している(図 10)。垂木の中間に 1 本の母屋が通るが、位置は中央よりもやや上方に寄る。柱・梁・桁の接合部には、他の和小屋形式の土蔵とは異なる形式を見る。

4.4 諸味蔵

棟札は残っておらず、建設年代、棟梁は不詳である。平屋建てで、平面規模は梁間 5 間(約 9.1m)・桁行 10 間(約 18.2m)、棟までの高さは約 5.9m となっている。基礎には院内産の石が使われ、外壁はモルタルのような仕上げとなる(図 11)。外部に面する背面と側面には窓が設けられているが、これらの窓には縁取りはほとんど見られない。また出入口周りにも縁取りは見られない。内部については、正面の扉は引き戸で、扉の周りには醸造用の道具が置かれている。床は土間となっており、床の高さは工場とほぼ同じ高さである(図 12)。小屋組は 3 段重ねの和小屋形式で、概ね上下に均等に重なる(図 13)。垂木を支える母屋は 2 段目の梁に載り、垂木のほぼ中央に納まる。内壁面には貫を現しにしない。

4.5 彦四郎蔵(四代)

棟札は残っておらず、建設年代、棟梁は不詳である。平面規模は梁間 3 間(約 5.3m)・桁行 5.5 間(約 10.1m)の 2 階建、棟までの高さは約 5.6m となっている。基礎には院内産の石が使われる。外壁は腰下が籔子下見板張り、腰上は砂漆喰で仕上げられている(図 14)。窓は正面、背面、道路に面した側面に付けられており、窓周りには白色の漆喰による縁取りがあるが、正面上階の窓だけは、窓の上に屋号を記した上で、窓上部の弓形の装飾を除いて黒く塗る。出入口には下屋をかけ、蔵前の空間が付属する。戸口には両開きの扉は用いられず、外側に漆喰塗りの引き戸(現在は動かない)を建て込み、内側に木戸を付す(図 15)。内部は 1 階が簀子敷き、2 階は板張りとなっている。なお、対象の土蔵で唯一、小屋組を洋風小屋組とし(図 16)、年代がやや下った土蔵と見られる。

図 11 諸味蔵外観
(著者撮影(2023))

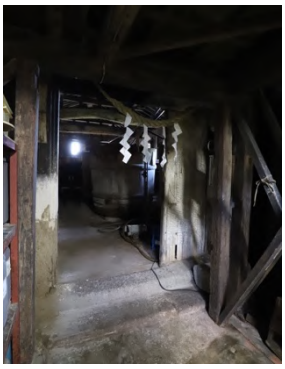

図 12 諸味蔵出入口付近
(著者撮影(2022))

図 13 諸味蔵内観
(著者撮影(2022))

図 14 彦四郎蔵(四代)外観
(著者撮影(2023))

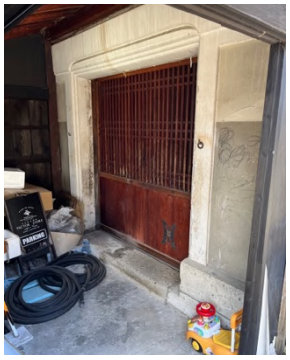

図 15 彦四郎蔵(四代)出入口付近(著者撮影(2023))

図 16 彦四郎蔵(四代)小屋組
(著者撮影(2023))

図 17　旧高橋家住宅土蔵外観（著者撮影(2022)）

図 18　旧高橋家住宅土蔵出入口付近（著者撮影(2022)）

図 19　旧高橋家住宅土蔵 2 階（著者撮影(2022)）

4.6 旧高橋家住宅土蔵

内部には棟札が残っており、建設年代は明治 44 年、工匠は三浦敬吉である。棟札の裏面には大工として 16 人の名前と出身地区が記されている。二階建てで、平面規模は梁間 3.5 間（約 6.3m）・桁行 6 間（約 10.9m）、棟までの高さは 5.2m となる。蔵全体は下部が吹き放ちの鞘に納まっている。（図 17）。基礎には院内産の石が用いられる。外壁は下部に石が貼られ、上部は白色の漆喰で仕上げられる。扉は 4 重構造で、外側には黒漆喰で仕上げられた両開きの扉（精緻な鞘飾りを付す）が、内側には漆喰を塗り込めた引き戸、木製板戸、ガラス引き戸を重ねる。正面の扉上部には七福神の恵比寿、大黒天、蔦模様の鏝絵が施されている（図 18）。窓周りの縁取りは黒漆喰で仕上げ、段をつけた出隅の部分に白色を出す。上部の弓形の装飾は窓ごとに形や色を僅かに変えている。内部の小屋組は 2 段重ねの和小屋形式で、2 本の梁をほとんど隙間なく重ねる（図 19）。

5 各建築に対する横断的検討

5.1 細部意匠について

対象とした土蔵の意匠的特徴を捉える観点から、特に意匠的に違いが見られる項目を取り上げ、外壁の仕上げの違いや、装飾的な要素の有無を比較した。その結果、2 つのグループに大別できた。以下、これらについて述べる。それぞれの土蔵に見られる特徴を次頁の表 1 に示す。項目は、外壁の腰上（上部）、腰下（下部）、出入口、窓の 4 つである。2 つのグループのうち一方には、茂助蔵（初代）及び妙見蔵、兵助蔵（二代）、彦四郎蔵（四代）、旧高橋家住宅土蔵が該当し、他方には、仕込蔵、諸味蔵が該当する。

それぞれのグループの特徴を挙げると、第一に、茂助蔵（初代）及び妙見蔵、兵助蔵（二代）、旧高橋家住宅土蔵は共通して、仕上げとして黒漆喰が使われていることが注目される。黒漆喰は施工が難しく、高級な仕上げであることが一般に知られている[5]。特に兵助蔵（二代）は全面が磨き仕上げとなっている。旧高橋家住宅土蔵は黒漆喰を用いた出入り口や窓周りの装飾が特徴的である。彦四郎蔵（四代）は上階の窓周りに黒漆喰が使われる。仕込蔵、諸味蔵には黒漆喰は用いられてない。

また外壁腰下に関して、兵助蔵（二代）は装飾的な鞘飾りが付けられる。茂助蔵（初代）及び妙見蔵、旧高橋家住宅土蔵は腰下に石が貼られている。彦四郎蔵（四代）は腰下を籔子下見板張りとする。対して仕込蔵、諸味蔵は腰上と同様の仕上げとなる。以上から、茂助蔵（初代）及び妙見蔵、兵

表 1　グループごとの土蔵の特徴

区分		茂助蔵（初代）及び妙見蔵・兵助蔵（二代）・彦四郎蔵（四代）・旧高橋家住宅土蔵	仕込蔵・諸味蔵
外壁	腰上（上部）	正面、背面、側面の下部が黒漆喰仕上げ（茂助蔵(初代)及び妙見蔵） 黒漆喰の磨き仕上げ（兵助蔵（二代）） 砂漆喰仕上げ（彦四郎蔵（四代）） 白漆喰仕上げ（旧高橋家住宅土蔵）	砂漆喰仕上げ（仕込蔵） モルタルのような仕上げ（諸味蔵）
	腰下（下部）	黒漆喰仕上げの上に木製の鞘飾り（兵助蔵（二代）） 籔子下見板張り（彦四郎蔵（四代）） 院内石張り（茂助蔵（初代）及び妙見蔵、旧高橋家住宅土蔵）	外壁上部と異なる色に塗られている（仕込蔵） モルタルのような仕上げ（諸味蔵）
開口部	出入口	黒漆喰で立体的な仕上げ（居住用蔵、内蔵、旧高橋家住宅土蔵） 植物風の紋様や恵比寿、大黒天の鏝絵が描かれる（旧高橋家住宅土蔵）	白漆喰または砂漆喰で仕上げられ、鏝絵は見られない（仕込蔵、諸味蔵）
	窓	黒漆喰仕上げ （茂助蔵（初代）及び妙見蔵、兵助蔵（二代）、旧高橋家住宅土蔵） 白漆喰仕上げで、正面上階のみ黒漆喰仕上げ（彦四郎蔵（四代））	白漆喰または砂漆喰仕上げ（仕込蔵、諸味蔵）

図 20　斎藤彦右衛門の碑
（著者撮影(2023)）

図 21　佐藤才治の碑
（著者撮影(2023)）

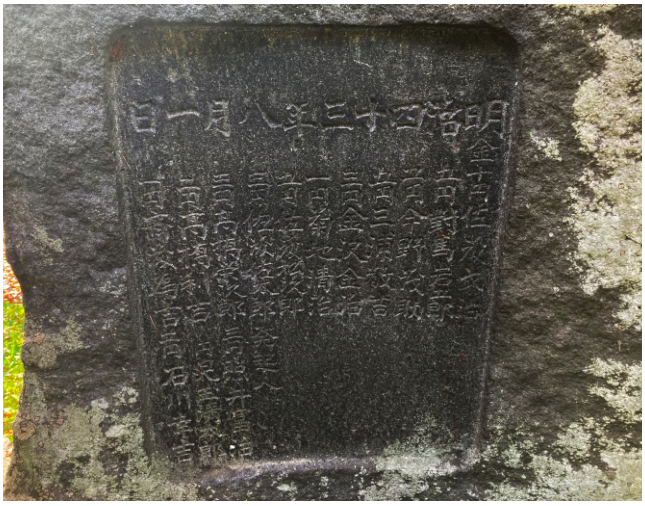

図 22　斎藤彦右衛門の碑裏面
（著者撮影(2023)）

助蔵（二代）、彦四郎蔵（四代）、旧高橋家住宅土蔵は比較的装飾的な土蔵、仕込蔵、諸味蔵は比較的装飾を抑えた土蔵であることが認められる。

5.2　建設に関わった大工棟梁について

建物の特徴を理解するために、その建物がいかなる人物によって建てられたのかを明らかにすることは重要である。本節では各蔵の大工棟梁について分析を行った。棟札から名前が確認できる大工棟梁は、茂助蔵（初代）及び妙見蔵の齋藤彦右衛門、兵助蔵（二代）の佐藤才治、旧高橋家住宅土蔵の三浦敬吉の 3 人である。これらの蔵は、前節における「意匠的な蔵」に該当する。齋藤彦右衛門と佐藤才治の 2 人に関しては、町内に石碑が見つかった。それらを図 20、図 21 に示す。石碑の記述から、2 人には師弟関係があることが確認されている。また斎藤彦右衛門の石碑の裏面に記されている、設立のために寄付をした人物の中には、佐藤才治、三浦敬吉の名前が見られ、それぞれ金十円、金五円を寄付していた（図 22）[6]。寄付額は佐藤才治の金十円が最も多く、三浦敬吉の金五円がそれに次ぐ金額となっている。これら 3 人の大工棟梁は、地域の多くの人々と関わりを持った人物であることが明らかとなった。

6　おわりに

本稿では、ヤマモ味噌醤油醸造元、旧高橋家住宅の土蔵を対象とし、各蔵の仕上げや細部意匠の違い、土蔵の建設に関与した大工棟梁について検討した。その結果見出されたことを要約すると、以下の 2 点にまとめられる。

①建物の細部意匠の違いに注目すると、2 つのグループに大別された。一方は比較的装飾的な土蔵、他方は装飾を抑えた土蔵である。

②土蔵の建設に関わった 3 人の大工棟梁は、地域の多くの人々と関わりを持つ人物であったことが窺える。

今回対象とした土蔵建築は、財力を示すための装飾性が、近代へと継承されてきたことがわかる建築であり、手がけた大工棟梁を通して、地域的な広がりが確認できる建築であった。

注および参考文献

[1]本研究は、東北学院大学工学部環境建設工学科﨑山研究室によって行われた現地調査の結果をまとめたものである。2022 年度に 6 名、2023 年度に 6 名の学部 4 年生が参加した。

[2]秋田県教育委員会(1992)

[3]秋田県教育委員会(2004)

[4]各寸法は筆者らの現地調査に基づいた実測値である。なお、これらは全体の規模を伝える趣旨で示したものであり、平面規模は壁の内法寸法を、棟までの高さは 1 階床から棟木の下端までの高さを記した。

[5]黒漆喰は、白漆喰に煤や墨を添加することで作られる。施工の際、色むらや白華が起こりやすく施工に技術を要するとされ、一般に高級な仕上げとして扱われる。白色や淡い色の漆喰は、施工の際色むらが起こりづらく、装飾性を抑えたな仕上げであることが知られる。

[6]元の写真から photoshop で補正を行った（明るさ-60、コントラスト 100）。